

ナム・ワルサボウズ



現世利益の寺に集う 奇想天外な

サラリーマン僧侶達の

アイロニック・コメディ……………

ナム・ワルサボウズ



長棟まお

ナム・ワルサボウズ

昭和60年9月10日発行

定価1000円

著者 長 棟 ま お

発行者 遠 藤 留 治

発行所 株式 日 新 報 道
会社

郵便番号 105
東京都港区芝公園3-6-23
電話 03(431) 9561
振替 東京5-140840

(分)0074(製)256374(出)5738

印刷・製本 合同印刷株式会社
乱丁・落丁はお取り替えいたします

登場する坊さんたちについて

このドラマには、読み進むにしたがって、昭有、有真、昭一、昭宜、昭源、昭山と、合わせて六名の坊さんが登場してくる。つまり二番目に挙げた、唯一の預かり弟子である有真以外の人物は、皆一様に「昭」という文字で始まる法名ほうみょうを持っているのである。

「なんでわざわざ、こうも区別しにくい名前を付けるんだろう。」

と、齒がゆくお思いになる方も、きっと多いに違いない。

しかし、考えてみれば、ごく小さな頃に聞かされたおとぎ噺ばなしの中にも、しばしばこんな風に、ずいぶんと似通った名前が出て来はしなかったろうか。たとえば、うさぎさんの一家の話なら、ピョン子、ピョン助、ピョン太、ピョン吉、ピョン平、といった具合に……。

そう。ちょうどあの時のような要領で、しなやかに読み分けてほしいのである。もし、そうしていただけるなら、作者として、これに過ぎる光栄はない。

登場人物

川野辺昭有 かわのべしやうゆう 教化部きやうかぶにおいて、以下の四名を指導する立場にある学者僧。柴山大学しばさんに勤務。

(五〇代 前半)

竹中昭源 しやうげん 教化部の僧。説教の名手。(四〇代 前半)

瀬田有真 ゆうしん 特例として教化部に配属された見習い僧。(十九歳)

昭宜 しやうぎ 教化部の僧。(三〇代 前半)

昭一 しやういつ 同。(二十七歳)

昭山 しやうざん 上首じやうしゆの僧。(五〇代 後半)

清水まや 盲学校に学ぶ大学受験生。(十八歳)

男(おったまげりのおじさん) 信者。(五十八、九歳)

大北 白川学院大学理事長。(六〇代)

杉村 休憩所のおばさん。(五〇代)

村瀬 同。(同)

△以下、声のみ▽

交換手 (女)

会社員 (男)

長 沼 (老女)

受 付 (男)

岡田医師 (男)

五歳のまや

まやの祖母 (ちよ)

食堂の呼び込み

現代。

時 所 柴山深香寺 教化部の一室。

第一幕

第一場 五月初旬のある朝

舞台下手にドア、上手に窓があり、修復成^{しゅうてい}った多宝塔^{たほうとう}の屋根が見えている。ドアを入ると左壁面に棚(文房具各種、カセットテープレコーダーとテープ群、名簿、資料、御真言^{ごしんごん}のカード等が並んでいる。)その横には緑色の回転式黒板、さらに右手にはカーテンがあり、ロッ

カーへ続く感じ。中央の作業台様の大机にはダイヤル式電話と古い室内電話、および席によつて、それぞれの僧の個性に応じた品が適当に散らばっている。窓際の机上とその周辺には本が整然と並び、カバンが置かれている。部屋の下手隈には、花柄の電気ポットと不揃いの茶道具がある。

——暗黒。

山鳥の声があちこちに響き始め、舞台が明るくなるにつれ、時折遠くに長く尾を引いた法螺貝の音が聞こえる。

やがて静かにドアが開くと、朝の勤めを終えた風情の昭有と有真が僧体にて入ってくる。

昭有（穏やかに）とうとう来たね。ここが教化部、君の仕事場だ。

有真 はい。（あたりに視線を投げる）

昭有（有真につられるように棚のあたりから中央の大机に視線を移しながら）こうして改めて見直すと、何だか随分雑然とした部屋だな。

有真 はい。大きな寺院にはこんな場所もあるんですね。もし（窓を示し）あそこに塔がなかったら、とても寺とは思えません。

昭有 そう、そのとても寺とは思えない寺の一隅に君はやって来たわけだ。

——昭有、ゆっくり席へ向いながら有真に近くの椅子を示し共に腰をおろす。

有真 はい。でも本当にいいんでしょうか、僕なんかが入ってしまつて……。

昭有 確かに異例のことだろうな。十九歳の見習い僧を教化部に置くというのは。

——有真、うなづく。

ここで主になる仕事と言えば、やはり説教と御信者さんから寄せられる相談事への対応だからね。まあ仕事の性質上、殊に君を配属するについては反対も多かったわけなんだな。

有真 それは当然だと思います。

昭有 うん。

——昭一、スタジアムジャンパーにゆるみのあるズボンという出で立ちで入ってくる。

昭一 あ、おはようございます。

昭有 やあ。紹介しよう。この前から話していた瀬田有真君だ。

有真 (立ち上がり) 有真です。よろしくお願いします。(礼をする)

昭一 あ、昭一です。こちらこそよろしく。(礼をし、ロッカーへ向う)

——昭宜来る。ややくだけたワイシャツにプレスのきいたスラックスをはき、眼鏡をかけている。

昭宜 おはようございます。(いち早く有真を見て近付き) 初めまして。僕、昭宜といいます。有真君ですね。

有真 は、はい。

昭宜 ようこそ、じゃ、あとで。(ロッカーへ去る)

有真 すごい人ですね、昭宜さんて。何だか議員秘書っていう雰囲気。

昭宥 ほおー。なるほど、見るからに有能そうだから、彼は。

宥真 昭一さんの方は随分若く見えますけど、おいくつなんですか？

昭宥 確か今年で二十七になるんじゃないかな。

宥真 へえー。わからんものですねえ。どう多く見積っても二十そこそこにしは見えないのに……。

昭宥 まあそう驚かないでおあげなさい。彼は事あるごとに歎くんのだ。いくつになっても大人らしい風格が身に添わないというのは説教僧としては最悪だと言ってね。

宥真 そうかぁ。確かに童顔で説教というのは、やりにくいんでしょうね。

昭宥 うーん。だが坊さんが一様にもっともらしい顔付きで決まり切った説教をしたのでは、寺はますます魅力のない場所になってしまう。それは困るんだな、僕としては。……それはそうと、君は確か郷里の寺を継ぐべきかどうか、決めかねていると言ってたね。あの話はどうした？ もう結論は出たの？

宥真 いいえ、それがまだなんです。と言ってもほかにやりたいことがあるわけではないから、このままていくとたぶん継ぐことになるんでしょうけど……。

昭宥 (穏やかに) 何だかひとごとみたいだな。

宥真 そう、まさにそうなんです。人ってこんなに無感動に将来のことを決めてしまっているものなんでしょう？

昭宥 どうしても寺が嫌いというわけではないようだね。

宥真 はい。でも取り立てて好きという程好きでもありません。自分が果して坊さんに向いている

のかどうかも全然見当がつかないし……。

昭宥　なるほど。

宥真　だから……これはこの前、父の一周忌のときにもお話したと思うんですが、時々どうしようもなく不安になるんです。このまま何となくずるずると流されてしまっているんだらうかって……。

昭宥　こういう気持、わかっていただけますか？

昭宥　とてもよくわかる。わかるからこそ思い切って君をここへ呼ぶ気になったんだ。

宥真　僕はここで一体何をすればいいんでしょうか？

昭宥　まずは坊さんとは、そも何者であるかをじっくりと見極めることだな。何と言っても君自身の将来がかかっているんだからね。ところが君がこれまでに観察し得た坊さんと言え、お父上と僕がせいぜいだろう？　それだけで結論を出そうとするのは少し気が早過ぎないかな？

宥真　そう言われてみれば、確かにそうかもしれません。

昭宥　とにかく、ここで一緒に仕事をしながら焦らずに考えていこうじゃないか。
宥真　はい。

——昭宜、昭一、僧体そうたいにて相次いで戻る。

昭宥　（昭宜に）今日、昭源君は？

昭宜　まだお会いしていませんが、もうじき見えると思います。

昭宥　そうか。彼も忙しいからなあ。

昭一　昭宥さん。込み合う前に、多宝塔たほうたを案内してあげてはどうでしょうか？

昭有 うん。で、先達は？

昭一（宥真に）あのね。こういう時、いつもならアミダかジャンケンなんだけど、今日は君が選ぶといいですよ。

昭宜 さて、案内役は誰にします？

宥真 ああのう、僕、できれば昭有さんをお願いしたいんですが……。

昭一 はい。まずは順当に昭有さん御指名。

昭有（軽く笑い）それじゃ少しの間、離席しますからよろしく。

昭宜 わかりました。

昭一（ドアを開け）行つてらっしゃい。（しばらく二人を見送りながらたたずむ。ややあつて席に戻りながら）いい感じですね、ああして二人並ぶと。

昭宜 麗しい師弟のドラマ。「坊さん育てて二〇年。川野辺昭有シリーズ。さて今回の仕儀やいかに?!」というところですね。

昭一 よく言いますよ。僕らだって育てられたクチなのに。

——昭源、派手なポロシヤツ姿で、本を片手に来る。

昭源（大声で）やあ諸君、おはようノ

昭宜、昭一（口々に）おはようございます。

——二人が挨拶を返すうちに、昭源は本を机に投げ出し、黒板の中央に黄色の太字で大きく「閻」の一字を書く。

昭源 (その文字を示しながら) ねえ、これ知ってる? (面白くてたまらないという様に) なあ、この字。これ何て読むかわかるか? 門構に也ノ

昭宜 (昭源を見ずに) 遅刻してくる割には朝っぱらから元気ですね、相変わらず。で、今度は何です? 駄洒落ですか、それともまたボルノですか?

昭源 あ、朝っぱらから可愛気ないのな、相変わらず。こっちだってほら、坊主が寝不足っていうのはまずいなあとと思うからこそ、こうやって、はしゃいでるんじゃないか。しかも極めて学術的な問題なんだぞ、これは。

昭一 (投げ出された本を手に取り) 「説話文学の探求」? 昭宜さん、これボルノ雑誌じゃないようですよ。

昭源 あたり前じゃないか。しかもピカ一の新ネタだぜ、夕べ仕入れたばかりの。

昭宜 (顔を上げ) 酒飲んだ後で、よくそういう本が読めますね、昭源さんは。(文字に見入る) うーん、まず古語であることは確かでしょう? 見たことあったかなあ、こんな字……。

昭一 ヒントノ 昭源さん。ヒントを下さい。

昭源 そうだな。(重々しく) 君にとって最も偉大かつ神聖なものだよ、昭一君。

昭一 (考えながら) 母ですか? それとも大地とか……宇宙とか?

昭源 いや、いい線行ってるよ。でもその母ってのを、もう少し具体的に絞ってみないか?

昭宜 (うなずき) あ、へえ、あれ、こんな字を書くんですか。なるほど、偉大にして神聖、神聖にして卑俗、卑俗にしてまた莊嚴……。

昭一 わかった、乳房ちぶさ！……じゃ、ありきたりですね。

昭宜 (小声で昭源に) 無理ですよ、万年小坊主まねんこぼうずには。

昭一 (大声で) あゝ、へその緒お！

——昭源、昭宜、思わず吹き出す。

昭宜 君は一体、どういう発想をしているんだ。

昭源 全く、見かけどおりのマザコンなんだな。そんなことでどうするんだ、おい。

昭一 そんなー！ 万年小坊主まねんこぼうずの次はマザコンですか？ あんまりです。

昭宜 いや、現代では結構彼のような男がモテるんですよ。可愛いとか、何とかって。

昭源 しかし、へその緒とはなあ。

——遠くに読経とぎょうの声が流れ始める。

昭宥、宥真、来る。

昭宥 やあ。(入ったなり、黒板を見て静止する)

宥真 すごいなあゝ、さすがにきらびやかですね、修復直後しゅうふちくわくだと。(昭宥の当惑とうわくに気付き、黙り込む)

——昭宥、昭源、顔を見合わせる。

昭源 (照れ臭そうに) 消しましょうか？ (黒板消しをつまみ上げて) 消しましょうね。

昭宥 (穏やかに手で制し) いや、ちょうど良い機会だから、説明してあげてくれませんか？ 知らない人もいるに違いないから。

昭源 いやあ、それは昭宥さんにお願ひします。僕なんか言うとな話が軽くなっちゃいますし、第一、うる覚えだから嘘がまじる。

昭宥 靈異記りよういきか何かを見たんでしょう？

昭源 はい。

昭宥 これは、今から一二〇〇年程前に書かれた「日本靈異記にほんりよういき」という書物の中に出てくる文字でね。「シナタリクボ」と読むんだ。

昭宜 シナタリクボ。

昭宥 うん。直接的に言ってしまうば、女性の陰部を指す語なんだな。

——昭一、依然として腑に落ちない表情。

つまり、何というかな……。ご婦人方にしかない大いなる生命の出口のことだ。

昭一 あ、へえー。わかりました。随分優雅な呼び名なんですね。シナタリクボか……。

昭宥 皆さん先刻ご承知かしらんが、この「日本靈異記にほんりよういき」というのは、景戒けいかいという坊さんが仏教の話を集めて作った本だからね。その中にこんな文字が見られるというのは、案外印象に残る話題かもしれないな。

昭源 そうなんですよ、これをズバツと説教の枕まくらに持ってくるんです。(落語調で) えー、とかく仏教とかお釈迦様しやかさまなどと申しますと、何ですかこのひどく固苦しい、もっともらしい話が始まりそうですね。仮に皆さんが、ここは一番、坊さんの顔を立てて最後まであくび無しでつき合ってやろうとお思いいんたて下すたとしてしましても、まあなかなかそうはいかないもんでございます

が……実は私わたくし、先日ある書物……今からざっと一二〇〇年位前に書かれた仏教の書物を紐解ひもといて
おりましたんですが、そこにこの、どうしても読み方のわからない字があるんですね。……てな
調子でね。

昭宥 なるほど。こういう配慮があれば、法話ほうわの評判もよくなるわけだな。見習わなくてはいかん
なあ。

昭源 いや確かに受けることは受けますが、それも考えものですよ。折角せっかく、寺へ来たっていうのに
肝腎かんじんなことはみんな忘れて、シナタリクボだけ覚えて帰られたんじゃないかねえ。

——一同、笑う。

そこへいくと昭宥さんのは格調があるよな。「大いなる生命の出口」なんて言われたらありがた
い気がするもんな。僕なんかやっぱりあれば、出口というよりは入口っていう感じで意識しちや
うから、だめなんだろうなあ……。

——一同、一斉に昭源を見る。

(はつとして) ちょっと着替えてくるわ。(ロッカーへ去る)

昭宥 (ため息をつき) やれやれ、汗が出たよ。

昭宜 いつもながら、言うことがきわどいですね。

昭一 でも、分別ぶんべつがないというよりは勇気があるんですよね。

昭宜 いや逆。勇気があるというよりは、分別がないんですよ。(宥真に) なあ。

宥真 (考えて) ああ……それ、今すぐにお答えしなければいけませんか？

昭宜（擲^{ちやく}擲^{ちやく}して）いいえ、いつでも構わないのですよ。これは御信者さんからの電話ではございませんので。（ロッカーに向って）昭源さん？ 何ならこれ、消さずにおきましょうか？ いいシンボルになりますよ、きつと。

昭源（ロッカーから）取りあえず、それは消そうや。もし、この部屋のシンボルにしたいなら、きちんと筆で書いたのをドアに貼^はらなきゃだめさ。

——昭一、丁寧^{ていねい}に黒板の文字を消す。

読経^{とくぎょう}の声、止む。

宥真 そんなあ、冗談^{じやうだん}でしょう？ 冗談ですよ。

昭宜 いいえ、彼ならやりかねません。何と言ってもあの勢いですからね。

昭宥 まあ、あの様子では、なかなか止まんだらうな、この騒ぎは。

昭宜 ええ、もうシナタリクボ普及会会長とか何とか、名刺に刷^すり込んでおいた方がいいかもしれないよ。

——宥真以外、笑う。

昭一（宥真の肩を叩き）大丈夫、冗談ですよ、冗談。ほら、そんな顔してると、ますますからかわれるはめになりますよ。

昭宥（宥真に）最初の印象としては、やや強烈過ぎたかもしれないが、まあ教化部の連中は、おおよそこんな人達だから、君も覚悟しておいた方がいいぞ。（昭宜、昭一に向って）君達もほどほどにしてくれよ。

昭宜 それは昭源さんに言って下さい。

——昭源、僧体そうたいにて戻る。

昭源 いいえ、聞こえておりますので、どうぞご安心下さい。

——有真、しげしげと昭源を眺める。昭源、視線を意識して見返す。

昭有 あ、そうか。紹介が遅れたが、例の瀬田有真君だ。

有真 昭源さんでしたね。よろしくお願いします。（礼をする）

昭源 こちらこそ！（昭有に）とうとう上層部を説得なさったんですね。大胆だなあ！

昭有 うん、まあ多少もめたからね。当初の予定通り四月一日からというわけには行かなかったが、

良しとしなければならんだろうな。

有真 いろいろと、すみませんでした。

昭有 いやいや。実は彼のお父上は僕と同期でね。後年は郷里に帰って住職しゅうしやくをしておられたんだ

が、一昨年、亡くなられたんだ。で、その際に息子が高校を出たら、将来のことを決める前に、一二年、僕に預けたいと遺言ゆいごんされてね。いろいろ考えた末、取りあえず、ここで仕事をしてみるのがいんじゃないかと思って、特別に許可をいただいたという訳なんだ。

昭源 そのお父上って、ひょっとしたら瀬田昭空しやうくうさんじゃありません？「昼寝の寺」の。

昭有 そう、その人だ。

昭宜 何です、その「昼寝の寺」って？

昭源 うん、かなり前に雑誌で見た記憶があるんだけど、休日の午後に寺を解放してるんだってさ、